

「朝清水記」(『一蝶流謫考』(涼仙老樵(山東京山)編)所収)

『続燕石十種』第一卷 p.355

### 朝清水記

唐土に貧泉あり、和朝に紀の路の毒水あり、近江のや、醒ヶ井、関の清水、大原や、清和井【「左注」セガ井】臘の清水など、代々の歌人のめでたき言の葉の心ふかし、されば、往昔の伶聘人も、我此島の浪のはなれ鶴とははなたれ来らず、灘の塩焼蟹の衣はきても見ずや、残れる歌枕もなく、とゞまれる日記も見えず、ひたこらす【「傍注」すらに、一本】神の産給へる島の、それがまゝの名所とて、枉のかつら長く伝へきぬれど、鳥の跡せし文字もさだかならざる、山木森々たれども、流るゝ川もなく、湛たる池もすくなし、一島水涸て、たゞ岩もる、雨の朝の潦、湯を忍ぶるたよりとなれり、実やおほやけのかしこきおきて、ことにかく罪あるをうつさるゝ地、宜なる哉、中に就て、わが住む阿古の浦山は、あまさかる鄙の夷中、漁樵交り隣すれども、貢の塩の跡にたぐへて、朝な夕な煙りみぢかく、夜寒の床の明る事な【「旁注」永、一本】し、しかはあれど、到景五村に秀て、朝に見れば、天の原、富士の高根、幾島山の遠に聳へ、白扇を逆にかくる東海の天と、隠士丈山子が詩にいへり、曾て聞、法歌三蔵の五天に、漢朝の扇を見たりし心にかよひて、古郷に詠め馴しかたみは、このすがた計りぞと、潮浪にひぢまざる、袂も、うち覆ふ間に、浪の煙り立ふたがる雲に、髣髴として見えずなりもてゆく、已に夕陽浪にひたせる頃、富賀今崎【「頭書」富賀今崎は阿古の隣村也】の釣舟、おのがじ、いどみあひて、家路に帰る欸乃【「頭書」欸乃八漁歌ナリ】の声【「傍注」坤齋日抄、上廿五ウ】心を勞しむる媒ともなれり、【涼仙曰、此船に乗ば、古郷へも帰るべきを、心をくるしめつらん、一句真情也】猿あらば、叫ぶべき山、峽、後にはそぼだち、鶴を飼ふべき、怪松門に存せり、月雪の眺望、哀れ罪なく見まほし、松の木柱、竹を編る垣、不破にはあらぬ茅庇【「左注」カヤノノキ】あれゆくまゝに守りすて、夏待つ宿の生、瓢、瓢と軒ふくいよすだれ、扉に近き岩嶂に、(草冠+緑)蘿を伝へる飛滝を見つ、是や隣康が山沢の水に、元芝が黄州の竹をもとむるに【「傍注」めて一本】昼夜を捨ぬ算をうけたり、杜子が浣花溪に謫せられて、奴僕が運ぶ巫峡の水、消渴之疾をあへて【「傍注」安し、一本】竹竿濃々として細川流るゝ、と作れるなどあらまし、流泉喙木の曲枕に伝ふ、松の嵐、棘の中を潜る水、みさほに落る竹の滴り、彼に恥彼を友とす、予はもと武陵画工の庸人、されば、三日詩をいはざれば、口荊棘を含み、年月の手なれ草も忘草に根をかえて、朽木がきの跡の如くに、きえもてゆくもはかなしや、せめては、巨勢千枝の古き跡を尋ねまほしきに、彩種求るに疎ければ、丹青器に尽き、筆紙机に絶ぬる、高然暉が重れる山、季唐が野洞の牛も、目前に視、傍に馴行ふ事の静なるにつけては、捨べき時に術をも得ぬべき、かぞふれば、齡半百に向として、懶惰日々に添ひて、斧をとり、鋏をうつ勢ひもなければ、しばし世渡るたつきとて、鄙嗇欺言の商家になりて、軒一字の酬【「左注」カヤブキミセ】をひらき、其中に陶朱公が富貴をこめて、伯倫が酒、陶嶙【「傍注」潜、一本】が米をかさねて、木樵が(米偏+鹵)宛て、漁叟が簑代る時は、徐福が船をたのめて、蓬萊に不老の薬を待侘るにぞ、孫晨が一束の稿をも貯ず、姑蘇台鳥棲て、阿房狐の埒に空し、篋も竹朽なば、水は岩根の主となりて、幾世歴ぬべき、

埋むべきうき身はいかにながらへてけふまでむすぶ苔の下た水

于時元禄壬午春【「頭書」壬午は元禄十四年也】

散人牛麿

執筆於阿胡村茅舎

右清水記一編、富士の画に添て、多賀孤雲の家に伝えたるを、武済のぬしの写したるを、また写し置もの也

元文三戊午秋

青梧主人

涼仙曰、余が旧識竹垣氏【俗称正蔵御代官】一蝶ずきにて、画幅、巻軸数品を蔵せられし、件の朝清水記、一蝶肉筆を珍藏せられ、余一覽せしに、美濃紙のやうなるものに書たるを、横巻にしたる也、字をけして脇にかき入れたる所もありて、筆意飛動、真跡疑団なきものに、古筆家の鑑定書添ありしは勿論也、年号に壬午と在るが元禄一四年にて、一蝶が三宅に謫せられての四ヶ年にあたり、一編の文章にて、画道の外学才在りしをも知るべし、一蝶が友かの民部は、元来邪曲欺貪の者にて、貴公子を煙花に狂はしめし罪を、時の権家の白眼中得到たるい、一蝶連座せられて、謫居十年の寒骨を苦しめしなり、若微運にして骨を孤島の土に、一蝶は、今の名は残るまじ、帰島の後にこそ、英の名は、馨けれ、人間五福寿を上とすとは、宜哉むべなるかな